教養学部教養学科超域文化科学分科

表象文化論コース・ガイダンス資料

コース HP：https://repre.c.u-tokyo.ac.jp/

表象文化論は、多様なジャンルの芸術・文化に対して横断的にアプローチする学問です。1986 年、東大教養学部に学科が設立されて始まった、比較的若い学問分野で、それゆえの野心的な進取の気風が特徴です。ほかにも次のような特徴があります。
・ジャンル間の影響関係といった現象面での横断性よりも、多様なジャンルを貫く共通の歴史的条件や理論的問題の抽出に関心を向けます。
・映画をはじめとする視覚・映像文化と、演劇などのパフォーマンス芸術の研究を柱のひとつとしています。
・文化創造・実践の現場との関わりを重視します。
表象文化論： 民俗芸能から商業デザイン、文化政策、都市空間や仮想現実の創出まで、多様な現われを見 せる表象行為を幅広く扱って、「表象としての文化」の創造－伝達－受容の仕組を解明し、 新たな芸術・文化理論を構築する。（専攻案内より抜粋 2022/5/31）

研究室・学生室

・表象文化論研究室（18 号館３階　電話：03-5454-6411）
・表象文化論教務補佐室（8 号館３階 307 室）
・表象文化論学生室（8 号館３階 308 室）　院生と共用

履修制度

卒業には 76 単位が必要です。そのうち、卒業論文 10 単位、高度教養科目６単位以上、言語科目（2 言語以上）22 単位以上、コース科目 28 単位以上が必要です。コース科目については、科目名（講義題目とは違うものです）「表象文化基礎論」「表象文化基礎論演習」「表象システム論」「表象メディア論」「表象文化史」「表象文化史演習」「表象文化論実習Ⅰ」「表象文化論実習Ⅱ」は必修科目で、卒業までにかならずー度履修しなければなりません。また、必修以外のコース科目のなかから、演習科目を４単位以上取得しなければなりません。一度単位を取得した科目は履修できませんが、同一講義が複数の科目名で開講されている場合もあります。詳しくは『教養学部便覧』をかならず参照してください。

スタッフ

コースの専任教員は 15 名です。

氏名	専門
一條 麻美子	中世ドイツ文学
ジョン・オデイ	分析哲学・心の哲学
加治屋 健司	現代美術史
マチュー・カペル	映画学・日本映画
河合 祥一郎	16-17 世紀イギリス演劇
韓 燕麗	映画学・中国語映画
桑田 光平	フランス文学・芸術論
清水 晶子	フェミニズム・クィア理論
竹峰 義和	近現代ドイツ思想史・映像文化論
田中 純	思想史・視覚文化論
中井 悠	実験／電子音楽・パフォーマンス
乗松 亨平	近代ロシア文学・思想
針貝 真理子	演劇学、ドイツ文学・思想
三輪 健太朗	マンガ論、近代視覚文化史
森元 庸介	思想史

他コース・部署所属の教員にも授業を提供してもらっています。

朝倉 友海	哲学・比較思想
沖本 幸子	日本中世演劇・芸能
中島 隆博	中国哲学
星野 太	美学・表象文化論

非常勤講師にも授業をお願いしています。
井手口彰典（S）・福中冬子（A）「音響芸術論」
土居　伸彰（集中講義）「映像芸術論」
中島　那奈子（集中講義）　「舞台芸術論」（舞踊論）

表象文化論への導入として、コース教員によるオムニバス授業「表象文化論」を木曜３限に開講しています。表象文化論コースへの進学を考えている人は、かならず履修するようにしてください。

過去の卒業論文題目
2018 年度
・ジャン=ジャック・ルクーのデッサンにおける人体と建築の表象――ルクーとは誰だったのかという問いに対する一つの可能な解答の提示
・ジョルジュ・バタイユの「異質学」――「吐き気を催させるもの」、あるいは「断念しえぬもの」の行方について
・ピクサーの特徴的表現技術から解析する映画『リメンバー・ミー』（2017）の表現の独自性
・テレビジョンから革命の理論へ
・浦沢直樹『PLUTO』論――ロボット／キャラクターの複数化する身体／内面
・都市型国際美術展としての横浜トリエンナーレ
・野田秀樹作品における「天皇」表象の問題
・フォーク歌手フィル・オックスのプロテスト性――楽曲と政治性の変化から見る反逆の精神
・能〈井筒〉における夢とワキの立場――物着の能を手掛かりとして
・民族誌映画の新たなプラットフォームへ――映像人類学者ディビッド・マクドゥーガルの映像ワークショップ実践

2019 年度
・是枝裕和作品論――ジャンルとしての家族映画のこれまでといま
・スーパー歌舞伎Ⅱ『ワンピース』から見る現代の歌舞伎
・復元という行為――映画『ジュラシック・パーク』シリーズにおける古生物の表象
・濱口竜介の時間と空間

・現代日本における芸術と公共性――「表現の不自由展・その後」を中心に
・ジュディス・バトラーにおける責任論
・〈娘役〉のクィアネス――花總まりを例に
・相米慎二監督作品における通過儀礼

2020 年度
・宮崎駿の飛翔表現における機械と魔法
・アニメーション作品におけるタイムスリップ
・マジックの美的経験――イリュージョンからフィクションへ
・二次創作とファンコミュニティ――『Undertale』AU を事例に
・脱毛行為と美しい身体――身体加工における眼差しと感覚
・津島佑子の後期作品における動物――『笑いオオカミ』と『ナラ・レポート』を中心に

2021 年度
・山戸結希初期作品における視線と女の子
・つかこうへいにおけるキッチュとドラマ
・ビー・ガン論――ビー・ガン監督作品における夢の諸相
・トーベ・ヤンソン《岩礁小説》における石の様相――触れえないものに触れるメディウムとして
・椎名林檎の初期作品における歌声と身体――その共犯と背反の関係について
・成れの果ての世界は語る――伊藤計劃『ハーモニー』は「わたし」たちに何を見せたのか
・チェルフィッチュにとっての「演劇」像――「消しゴム」シリーズにおける〈映像演劇〉を中心に
・ヴィクトル・シクロフスキー：《異化》の手法と『Zoo』について

2022 年度
・雰囲気の文章：内田百閒の希薄な空間
・『スター・ウォーズ』シリーズの円環的なノスタルジーの分析：続三部作に見る回帰と超克の葛藤

- 安田侃彫刻論：かたちの展開と外界への関わりをめぐって
- BTSと˝SELF˝：˝虚実˝と仮面の表象に着目して
- マイケル・ジャクソンの越境性：身体的特徴、声、ダンスに注目して
- オウム真理教の音楽
- 集団を描くアニメーション：エドゥアルド・ナザーロフ作品における動物の群れと群衆
- アートキャンプ白州：境界を越えるアートの実験場
- 石原吉郎の「位置」と「夜」：第一詩集『サンチョ・パンサの帰郷』を中心に
- 青山真治監督作品における視線と空間：後期長編作品を中心に
- 『刀剣乱舞』消費の特徴